



# 地域環境宮島学習センター 宮島こもん

広島工業大学大学院 環境学研究科 地域環境科学専攻  
平川 隆 啓

## 地域がキャンパス 宮島こもん

瀬戸内海に浮かぶ小さな島と対岸の私立大学がタッグを組んだ。観光地そして世界遺産として有名だが、高齢化や過疎化に悩む宮島と、地域や環境分野の新しい学びを模索する広島工業大学。学生が地域に入り込み、住民と一緒にまちづくりの知恵を絞る取り組みだ。

まちを歩く。地域に出る。フィールドで学ぶ。その拠点として広島工業大学地域環境宮島学習センター(愛称・宮島こもん)が立ち上がった。

高齢化率35%の廿日市市宮島町。人口は2000人を割り込み、まちなかでも空き家が目立つようになった。そんな空き家のひとつが今、宮島こもんの拠点になっている。

## 地域を体験 フィールドワーク

その3年前、広島工業大学の学生たちが宮島へと海を渡った。まちを歩くことで地域の魅力や課題を探るフィールドワークを実践。「路地が入り組んでいる」「五重塔がいろんな場所から見える」「まちそのものが面白い」。厳島神社だけでなく、地域全体に魅力を感じる学生たちの声が上がった。

その成果をまとめ、地元で展示会を

開催。「もっとまちの魅力を自分たちのまわりにも伝えたい」。この住民の声がきっかけとなり、住民と学生が地域の魅力や課題について意見交換する「まちづくりワークショップ」を企画。住民だけでなく、島内外の人も加わり、30人ほどが集まった。

## ユニークな視点で まちづくりワークショップ

宮島といえば大鳥居に、鹿、もみじ饅頭……。「ありきたりなイメージしかなかった」。地元宮島で呉服屋を営む勝井美恵子さんは、そう考えていた。

学生と一緒にユニークな視点で宮島の魅力を捉えなおす。まちを実際に歩くことで、地域の意見が次々と交わされた。「路地って中庭のようで心地よい、ここを歩く楽しみを見つけた」。と勝井さんは思った。路地を紹介するまち歩きや、軒下を飾る住民アートなどが、アイデアとして提案された。

## 人とのつながり 住民と学生のコミュニケーション

このワークショップの裏には、住民と学生の面と向かった対話が繰り返されている。呼びかけからはじまった住民へのあいさつ、祭りへの参加、宮島のまちづくりに関するヒアリングなど、情報の発信と交流の機会を重ねた。そんなコミュニケーションがあったからこそ、今では学生が住民と気軽に会話できる関係が育ってきている。

「交流こそまちづくりの基本」。宮島町並みを考える会の菊川照将さんは学生たちに思いを伝えた。

「学生に宮島に住んでもらおう」。そう、話を持ちかけてきたのも、菊川さん。「その土地で暮らすことも、まちづくり」

と考えている。

昭和10年に建てられた1軒の町家を学習センターとして、そして学生が実際に住む家として提供してくれた。

## 住む・暮らす まちづくりを研究

平成18年10月、広島工業大学地域環境宮島学習センター(愛称・宮島こもん)が開所した。ただ、施設を整備するだけでなく、学生が住む。この地域にとってのまちづくりとは何か?「ここでの暮らしも、まちづくりの学習であり、実践でもある」と住んでいる自分は感じた。

住み始めると、まずは子どもたちと仲良くなった。そして間もなく「子どもたちの数は極端に少ない」。と近所の母親から聞いた。よくあいさつをするのは、お年寄りである。「高齢者は多いし、家にこもりつきりではね」とぼやく声も聞いた。「宮島にはなかなか新しい活動の風が吹き込まないから」。こう話す人もいた。

宮島こもんを拠点に住みながら、地域のこと、環境のことを身近に意識し、まちづくりの研究を続けている。

## 大人、高齢者、子ども、 多様な世代

まちは多くの課題をはらんでいる。それも単純ではなく、多面的である。しかし、実際に住むことで、複雑に絡むまちの課題にも、ヒントがあっってきた。

それを後押ししたのは、日常的なコミュニケーションに加えて、まちづくりを意識した市民団体との交流である。

宮島町並みを考える会の菊地寛さんは「町並みは形だけでなく、まちの歴史の継承でもある」と話していた。

▼ワークショップ



町家通りの会では、住民が協力し合って、軒下に行灯を飾っている。「明かりが灯ると、通りがトンネルのように幻想的なんだ」。宮郷晴督さんは行灯の美しさを、そう感じている。

NPO法人宮島ネットワークの濱岡寛次さんは、「宮島を元気にする人・グループをサポートしたい」と活動を始めた。

いろんな課題があり、いろんな想いがある。しかし、難解そうな課題解決も、その想いの先にあるのだと感じる。

まちづくりは一人ひとりの意見を実行実現していくことがベースにある。「何かひとつの解答を求めると、いろんな解決策で盛り上げていくこと」。どんなに複雑でも、みんなのチカラが発揮できる地域と環境が備わることで、まちづくりはもっと展開するのだと、現場で学んだ。

## 対話を一つずつ結びつける シンポジウム

いろいろな人に出会うと、お互いの関係を考えたい。一人ひとりの想

いがつながれば、宮島の活性化にだって結びつく。「十人十色のつながりを示せたら、まちの元気を感じてもらえる」。そんな想いが、宮島こもんでの半年を通じて湧いてきた。

平成19年3月18日、11人の宮島内外で活躍するまちづくり人が活動の話題提供をするシンポジウムを開いた。

「ネットワークを広げるきっかけ」。そのために、島外でも宮島をフィールドに実践するまちづくり団体を集めた。

NPOくれシェンドの上元新一郎さんは、宮島でリーダー育成の研修会を開いている。「宮島で、もっとワークショップの技術を活かすには」。研修会での模索から、ワークショップの可能性を示してくれた。

現役学生が宮島で人力車を引く安芸人力組。「あまり気負わず、でも元気な宮島が好きだから活動している」と近藤雄峰さんは話してくれた。若者の勢いがまちを変えることを期待させてくれる。

他にも、宮島町並みを考える会、NPO宮島ネットワーク、宮島商工会、宮島観光協会、宮島小学校……。「いろんなネットワークがあるからまちづくりの妙案が期待できる」。そんな感想も聞こえてくるシンポジウムとなった。

## 宮島地域情報誌 まちづくりに発展

さまざまな活動を続けてくると、もっと発信したくなるし、もっと交流したくなる。小さな地域情報誌「宮島アルキメデス」も制作した。

宮島アルキメデスは、宮島を歩き愛でるをコンセプトに編集した宮島情報誌だ。

家のスキマを縫うように入り

組む石段は「立体階段」。植栽を食い荒らす鹿との格闘のすえ考えられた植栽をベランダに集めた「植木干し台」。これらはみんな住民の息づかいである。

「あなたと一緒に歩きたい!」。宮島アルキメデスのキャッチコピーだが、まさに、宮島を歩きまわることから始まり、まちに目を向ける楽しみを伝えること。まちづくりへと一歩踏み出す、発信・交流の地域情報誌である。

## 小さな島と地元の大学 実践で協力

対話ができてこそそのまちづくり。それが学びの場となる。宮島こもん界隈は、まちづくりの展開が楽しみになってこそその教室なのだ。

広島工業大学の学生がまちづくりで入り込んだのは、3年前。宮島を歩くことで見えてくる魅力をさぐった。宮島のまちとしての魅力を伝えたいという想いが、センターの実現に結びついている。

とくに、環境や地域に関わる学生には、まちや地域といった具体的なフィールドが欠かせない。「教育・研究⇄発信・交流⇄展開と、次へと広がる活動が楽しみ」。大学と地域が現場から切り開く、この斬新なプロジェクトへの期待は膨らむ。

▶展示会

